慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	2002年ＦＩＦＡワールドカップに関するテレビ報道の内容分析と視聴者の評価
Sub Title	Content analysis and audience evaluation of TV reports on 2002 FIFA World Cup
Author	萩原, 滋(Hagiwara, Shigeru)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2003
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.57 (2003.) ,p.33- 49
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000057-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2002年FIFAワールドカップに関するテレビ報道の内容分析と視聴者の評価

Content Analysis and Audience Evaluation of TV Reports on 2002 FIFA World Cup

萩　原　滋*
Shigeru Hagiwara

Media coverage of nations and individual participants in 2002 FIFA World Cup was measured by quantitative content analysis of selected TV news and sports news programs broadcast nightly for a period of May 23–July 5, 2002. Excepting Japan, South Korea, the co-host of the game, topped the list of foreign nations, followed by Brazil, in terms of the length of coverage during the period. Accordingly, more detailed qualitative content analysis was conducted to find out how the nation, team, and people of South Korea were represented in these TV reports. As for the coverage of individual participants, David Beckham of England came to the top, followed by Philippe Troussier, Japanese team coach, and Ronald, Brazilian ace striker. Furthermore, university students' evaluation of various aspects of media performance and outcome of the game was examined, based on the questionnaire survey conducted in October 2002, three months after the game.

1. はじめに

2002年5月31日に開幕した日韓共催FIFAワールドカップ（以下，W杯）は，それから1ヶ月の大会期間中，連日，各種メディアで大きく取り上げられ，サッカーファン以外の多くの日本人を巻き込んだ巨大なメディアイベントとなった。

1998年のフランス大会に続いて2度目の出場を果たした日本代表は，初戦でベルギーと引き分けてW杯初の勝ち点をあげた後，ロシア，チュニジアを連破して予選リーグをトップで通過，決勝トーナメント初戦でトルコに敗れてベスト16に止まったものの，代表チームの予想以上の躍進がW杯に対する日本人の熱気に弾みをつけたことは間違いない。また厳しい予選リーグを勝ち抜いた共催国の韓国がイタリア，スペインと相次いでヨーロッパの強豪チームを破り，アジア勢初のベスト4進出を果たしたことも，日本敗退後のW杯に対する関心を維持することに貢献したように思われる。その後，韓国は準決勝でドイツ，3位決定戦でトルコに敗れて4位となり，6月30日の決勝戦ではブラジルがドイツに勝っ

* 慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所教授（社会心理学，コミュニケーション研究）

て通算5度目のW杯制覇を達成した。

W杯終了直後に実施されたNHKの全国調査では（上村，2002），回答者の7割以上が予選リーグでの日本代表の試合や決勝戦のテレビ中継を見たとしており，Jリーグなど日頃からサッカーに親しむことのなかった人たちもW杯には高い関心を示したことが明らかにされている。またビデオリサーチ社の視聴率データ（関東地区）を見ても，日本―ロシア戦が66.1%と1962年12月以来，歴代3位の高視聴率を記録したのに次いで，ブラジル―ドイツの決勝戦が58.1%，ドイツ―韓国の準決勝戦が48.3%と日本代表以外の試合もきわめて高い視聴率を示しており，W杯への関心は，自国チームに限られることなく，世界水準のサッカーに広く向けられていたことが確かめられている。

さて私たちは，外国・外国人イメージを主題にテレビのステレオタイピング機能を多角的に分析する研究プロジェクトを継続しており[1]，その一環としてこのメディアイベントを取り上げ，テレビ報道の中で参加32カ国がどのように扱われているかを調べることにした。W杯の開幕前から参加チームの国情や文化的背景，キャンプ地での活動，あるいは特定の選手や監督に焦点を当てた多様な情報が伝えられており，ここでは試合中継ではなく，サッカー以外の情報を含めてW杯関連のテレビ報道を幅広く捉えようとしたのである。実際には開幕1週間前から閉幕5日後までの1ヵ月半にわたって在京3局の夜のニュース・スポーツニュース番組をビデオに収録して，W杯関連の報道内容を分析したわけだが，それと同時にW杯による外国・外国人イメージの変化の様相を探るために開幕直前，閉幕直後，及び3ヵ月後の3度にわたって大学生を対象とする質問紙調査を実施した。

国際的スポーツイベントによる外国イメージの変化に焦点を当てた社会心理学的研究としては，1988年のソウル大会以降のオリンピックごとに大学生のパネル調査を繰り返している高木，坂元らによる一連の研究が注目される（高木・坂元，1991; Sakamoto, Murata, & Takaki, 1999; 向田・坂元・村田・高木，1999）。これらの研究を通じてオリンピック前後の外国人イメージの変化に一定の傾向が見出されているわけではないが，自尊心の脅威や日本の成績の良否，相手国との類似性の認識などイメージ変化に関連する要因がいくつか指摘されており，最近では特にメディア情報との接触が重視され，その内容を検討する必要性が示唆されている。いくつもの競技が行われるオリンピックに比べると，ひとつの競技での代表チームの勝敗を競うW杯は国と国との対抗意識が前面に出やすく，多くの点でスポーツイベントとしての性質を異にしている。今回のW杯に関しては，やはり他の国よりも韓国に関するイメージの変化が大きく，開幕前から閉幕後にかけて「愛国心が強い」「気性が激しい」「自己主張が強い」「集団主義」「自己中心的」といった側面で韓国人のイメージが強化され，それは閉幕3ヵ月後にもある程度維持されたことが上述の3回にわたる調査によって明らかにされている（上瀬・萩原，2003）。

W杯の熱気が冷めやらぬ頃からすでに世論調査の結果や評論・随筆の類が新聞や雑誌の紙面を賑わしてきたが，W杯に関する学術的研究，実証的研究は意外と少なく，ようやくW杯閉幕から1年以上を経過して本格的な研究成果が相次いで出版されている（牛木・黒田，2003; 黄，2003）。そこで扱われているテーマやアプローチは多岐にわたるが，全体として見ると，W杯の盛り上がりに貢献したメディアの役割が重視されており，また日韓関係への影響や日韓両国の文化比較といった視点が強調されているように思われる。

さて日本人の対外認識や外国・外国人イメージに対するW杯の影響についての検討は別稿に譲ることにして（上瀬・萩原，2003, 2004），本稿では，W杯関連のテレビ報道の争点の推移と共に，参加32

カ国のいずれの国または人が多く取り上げられたかという点を中心に各国に関する報道量を継時的に分析し，次に共催国の韓国に対象を絞って，その報道内容の特徴を詳しく吟味した後，W杯終了3ヶ月を経過した時点で実施された質問紙調査に基づき，首都圏の大学生がW杯に関するメディア報道をいかに評価していたかを併せて検討してみたい。

2. テレビにおけるW杯関連報道の推移—量的分析

1996年6月1日のFIFA総会で2002年の日韓共同開催が決定して以来，今回のW杯に関する報道は散発的になされてきたが（黄，2002参照），それが連日のようにメディアを賑わすようになったのは，2002年5月31日の開幕を間近に控え，各国代表が次々とキャンプ地入りをするようになってからのことである。本研究では，午後10時以降の時間帯で視聴率の高い3つのニュース番組，NHK「ニュース10」，TBS「筑紫哲也NEWS23」，テレビ朝日「ニュースステーション」を主たる分析対象として，開幕1週間前の5月23日からビデオ収録を開始した。そして閉幕5日後の7月5日まで1ヵ月半にわたって録画作業を継続したが，これらは月～金枠の帯番組であり，週末に関してはNHK「サタデースポーツ（土）」「サンデースポーツ（日）」，TBS「スーパーサッカーPLUS（土）」「Jスポーツ（日）」，テレビ朝日「ANNニュース＆スポーツ（土）」「やべっちFC（日）」の6番組を収録している。従って，週日はニュース番組，週末はサッカーに特化した番組やスポーツニュース番組が分析対象とされたことになる。

放送の時期や局によって番組の構成に多少の変動はみられるが，ニュース番組に関しては，他のニュースとは別建てでスポーツニュースのコーナーを設け，その中で専門のキャスターがW杯に関するニュースを伝えるのが基本型となっている。大会期間中は，これにサッカー解説者が加わり，メインのキャスターやスポーツキャスターを交えてスタジオでのやりとりをすることが多くなっている[2)]。いずれにしろサッカー以外のニュースも含めて各番組の流れを項目ごとに分節化して，その内容を開始時からの経過時間と共に記録して構成表を作成し，それを以下の分析の基礎資料とした。

ここではW杯に関連するニュースのみを取り上げることになるが，まず参加32カ国のそれぞれについてどの程度の報道がなされていたかを調べてみることにしよう。開幕前のテストマッチを含めて試合の経過や結果に焦点を合わせたニュース報道，試合の解説や予想などを中心とするスタジオ談義，さらにはW杯自体に関わる争点など対象となる国を特定しにくい内容のものを除き，各国に関する報道量を多い順に整理した結果を表1に示す。これをみると，やはり全体として日本代表チームや選手，監督に関する話題が飛び抜けて多く取り上げられており，それに次いで共催国の韓国に関する報道量が大きくなっていることが確かめられる。日韓両国以外では，好成績を収めたブラジル，ドイツ，トルコ，前評判の高かったイングランド，フランス，アルゼンチン，イタリア，そして予選リーグで日本と対戦したチュニジア，ロシア，ベルギーの報道量が相対的に多くなっている。その一方で，クロアチア，ポーランド，デンマークについては，大会期間及びその前後の1ヵ月半を通じて試合以外の情報は全くカバーされておらず，参加32カ国の報道量には，きわめて顕著な格差のあることが明示されている。ここでは試合自体の報道を除外して各国の報道量を算出しているわけだが，それでも決勝トーナメントに進出して活躍した国ほどテレビでの扱いも大きくなる全体的傾向が明確にされている。各国代表の試合数と報道量との相関（r）を求めると，日本を含めた場合には.233と有意水準に達しないが，残りの31カ国については.585（$p<.001$）と強い正の相関が出現しているのである。

表 1 参加 32 カ国の成績と各国に関する報道量（秒）とその推移（試合を含まず）

	最終成績	全体	放送時期別			
			開幕前 (5/23-5/30)	予選リーグ (5/31-6/14)	決勝トーナメント (6/15-6/30)	閉幕後 (7/1-7/5)
日本	ベスト 16	33652	2240	14360	14621	2431
韓国	4 位	11446	1821	2606	5462	1557
ブラジル	優勝	5819	200	439	4407	773
チュニジア	予選敗退	4548	1569	2922	57	0
ロシア	予選敗退	4416	1371	3023	12	10
トルコ	3 位	3750	0	154	3573	23
ドイツ	準優勝	3699	80	56	2810	753
カメルーン	予選敗退	3517	2419	750	15	333
イングランド	ベスト 8	3070	372	976	1706	16
ベルギー	ベスト 16	2766	1403	1306	40	17
フランス	予選敗退	2518	726	1549	224	19
アルゼンチン	予選敗退	2083	816	1072	180	15
イタリア	ベスト 16	1948	896	261	429	362
ナイジェリア	予選敗退	804	447	0	357	0
セネガル	ベスト 8	642	52	458	114	18
アイルランド	ベスト 16	528	108	379	41	0
アメリカ	ベスト 8	279	8	0	271	0
メキシコ	ベスト 16	268	0	268	0	0
中国	予選敗退	256	13	243	0	0
スペイン	ベスト 8	250	9	41	176	24
パラグアイ	ベスト 16	165	142	23	0	0
エクアドル	予選敗退	136	136	0	0	0
スロベニア	予選敗退	63	46	17	0	0
スウェーデン	ベスト 16	59	44	15	0	0
ポルトガル	予選敗退	40	0	9	26	5
サウジアラビア	予選敗退	30	0	30	0	0
ウルグアイ	予選敗退	27	27	0	0	0
南アフリカ	予選敗退	26	26	0	0	0
コスタリカ	予選敗退	24	24	0	0	0
デンマーク	ベスト 16	0	0	0	0	0
ポーランド	予選敗退	0	0	0	0	0
クロアチア	予選敗退	0	0	0	0	0

上記の国以外では，カメルーンに関する報道量が全体の8位と上位にきているが，これは予定された大分県中津江村のキャンプ入りが大幅に遅れ，待ち受けた地元の人々とのその後の交流の様子が開幕前の大きな話題となったことによる。いずれの番組も時間にルーズで大らかなカメルーン選手と純朴で律儀な中津江村の人々の心温まる交流という視点を報道の基調としており，その後の予選リーグでのカメルーンの試合を伝える際には，中津江村での応援の映像を挿入することがほぼ慣例化していた。決勝トーナメント以降になると，さすがに予選リーグで敗退したカメルーンの報道は激減しているが，それでも閉幕5日後の「ニュースステーション（7月5日）」で『中津江村　夢の軌跡』という特集を放送しており，カメルーン代表と中津江村が今回のW杯の試合以外の報道の中心的役割を担っていたことが改めて裏づけられている[3]。

日本と韓国に関する報道量は，全期間を通じて高水準を維持しているが，その他の国に関する報道量は，時期によってかなり大きな変動を示している。開幕前から予選リーグにかけては，日本の対戦相手となったチュニジア，ロシア，ベルギーの情報が多く伝えられていたが，これら3国に関する報道は決勝トーナメントに入ると激減し，それに代わって日本と対戦するトルコ，そしてブラジル，ドイツなど上位に勝ち上がった国についての報道が急増しているのである。ただし決勝を争ったブラジルとドイツについては，閉幕後も帰国の様子やスター選手の動向が継続的に伝えられたのに対して，3位のトルコに関する報道は，大会が終わるとほぼ終息してしまった観がある。この他，仙台をキャンプ地とするイタリアのトッテイやデル・ピエロといったスター選手を追いかける日本人女性，前回優勝のフランスの司令塔ジダンの負傷と出場の可能性，足を負傷したイングランドのベッカムの復帰と予選リーグでのアルゼンチンとの因縁の対決，アルゼンチンのマラドーナの過去の栄光と来日の可能性などの話題が開幕前から予選リーグにかけて何度か取り上げられていた。

さて各国の代表チームのサッカー対決がW杯の本質である以上，試合の経過やゴールシーンのビデオ映像を中心とするニュースとそれに関するキャスターや解説者によるスタジオ談義がW杯に関するテレビ報道の中で大きな比重を占めるのは避け難いことであろう。W杯に関する主要な争点の推移を

表2　主要な争点に関する報道量（秒）とその推移

	全体	放送時期別			
		開幕前 (5/23-5/30)	予選リーグ (5/31-6/14)	決勝トーナメント (6/15-6/30)	閉幕後 (7/1-7/5)
試合（経過，結果，ダイジェスト）	26892	1156	18290	7386	60
スタジオ談義（解説，予測など）	31343	3241	14530	11028	2544
FIFA総会	414	376	0	38	0
フーリガン対策	1105	591	514	0	0
チケット問題	4590	801	3653	124	12
職場観戦	530	0	530	0	0
誤審問題	1014	0	0	1014	0
次期監督（ジーコ）	739	0	0	0	739
その他	1381	417	352	185	427

整理した表2には，試合自体のビデオ映像とスタジオ談義の放送量も示されているが，それらに割かれる時間が他よりも圧倒的に多くなっていることが確認できる。一方，試合以外のW杯関連の争点の報道量をみると，まずフーリガンの脅威とその対策，開幕が間近になっても海外向けのチケットが届かず，開幕後も空席が目立つといったチケット販売問題が開幕前から予選リーグにかけて大きな話題となり，次いで予選リーグで日本代表が活躍すると仕事や学校を休んで応援すべきかといった観戦問題，決勝トーナメントに入ってからは審判の誤審問題，そして閉幕後は日本代表の次期監督としてジーコの名前が浮上するなど時間の経過と共に争点が推移していった様子が明らかになる[4]。

それでは次に国ではなく人に焦点を当て，誰が取材対象とされることが多かったかという視点から今回のW杯のテレビ報道の特徴を検討してみよう。試合展開・結果についての報道やゴールシーンをまとめたフラッシュなどの中で選手名が表示されたり，スタジオ解説の中で言及された場合は除き，インタビューや記者会見，スタジオでのゲスト出演，あるいは特定のニュースの主体として個人名が明確にされた場合など試合を離れた状況に限って登場回数を算出して，それが10回以上に達した者を頻度順に並べた結果を表3に示す。ここには19名が名を連ねており，日本チームと外国チームの関係者がほ

表3　報道対象とされることが多かった選手・監督：登場頻度とその推移（試合を含まず）

選手・監督名	所属チーム	全体	放送時期別			
			開幕前 (5/23-5/30)	予選リーグ (5/31-6/14)	決勝トーナメント (6/15-6/30)	閉幕後 (7/1-7/5)
デイビッド・ベッカム	イングランド	38	8	11	17	2
フィリップ・トルシエ監督	日本	32	8	14	10	0
ロナウド	ブラジル	29	2	3	23	1
稲本潤一	日本	28	1	12	15	0
中田英寿	日本	24	0	14	9	1
V・ボルバ・リバウド	ブラジル	22	0	4	16	2
ジネディーヌ・ジダン	フランス	22	10	10	0	2
小野伸二	日本	22	7	9	6	0
フース・ヒディング監督	韓国	18	0	1	14	3
オリバー・カーン	ドイツ	16	0	0	12	4
宮本恒靖	日本	15	1	6	8	0
森島寛晃	日本	13	0	5	7	1
戸田和幸	日本	12	1	5	6	0
三都主アレサンドロ	日本	12	2	6	4	0
鈴木隆行	日本	12	0	8	4	0
G・バティストゥータ	アルゼンチン	11	2	6	2	1
ロベール・ワセージュ監督	ベルギー	11	4	7	0	0
ディエーゴ・マラドーナ	アルゼンチン	10	3	5	2	0
森岡隆三	日本	10	2	7	1	0

ぼ半々になっているが，その中ではイングランドのベッカムが最も多く取り上げられており，今回のW杯の主役ともいうべき立場にあったことが明確にされている[5]。5月25日の来日に端を発し，淡路島でのキャンプ，左足甲骨折から練習への復帰，予選リーグでのアルゼンチンとの因縁の対決，さらにはヘアスタイルや年収の高さ，夫人や子供などプライベートな部分までもが次々に話題とされ，開幕後はイングランドの試合のたびにコメントを求められるなど，開幕前からの全期間を通じてベッカムの姿が頻繁にテレビに映し出されていたのである。

外国人選手の中では，ブラジルが優勝したこともあって，ロナウドとリバウドの二人がベッカムに次いで多く取り上げられているが，それは主として決勝トーナメントの期間に集中している。また予選リーグまでは注目されなかったドイツのカーンが，決勝トーナメントに入って独特の風貌と一徹さ，鉄壁の守備で人気を集め，ゴールキーパーとして初めてFIFA最優秀選手賞を受賞したこともあって，ベッカムとは違った意味で，大会後のヒーローとなっている。さらに韓国代表が快進撃を続けるにつれてヒディング監督の手腕が高く評価され始め，韓国でのヒディング熱の高騰を反映する形で決勝トーナメント以降の登場回数が急増している。それとは逆に，前回優勝したフランスのジダンの負傷が開幕前の大きな話題となり，それがフランスの予選リーグ敗退の原因として扱われたために，開幕前から予選リーグにかけて数多くの報道がなされたが，決勝トーナメント以降になると，ジダンに関する話題は，ほぼ消失した形になっている。

一方，日本チームの関係者の中では，記者会見の様子が何度も放送されたためにトルシエ監督の登場回数が最も多くなっている。また日本人選手の中では，予選リーグで2ゴールをあげた稲本とエースの中田（英）に次いで，小野が多く取り上げられているが，それは開幕前に虫垂炎で入院してキャンプ入りが遅れたことが何度か取り上げられたことによる部分が大きい。

3. 韓国関連報道の特徴—質的分析

今回のW杯で日本に次いで韓国に関する報道が多くなされたことは，先に指摘した通りである。それは開会式と試合の半分が韓国で行われ，日本から多くの取材陣が派遣されたことを考えれば当然のことではあるが，韓国代表チームの快進撃も韓国関連報道を増加させる大きな要因となっている。後から振り返ると日韓両国が好成績を収めたことを当然視しがちになるが，いずれの代表チームもそれまでW杯で1勝もあげたことがなく，開幕前は自国チームの決勝トーナメント進出への期待の大きさとは裏腹に，それが達成される可能性はあまり高く見積もられてはいなかったのである（尾嶋・小林，2003参照）。ところが6月14日に日本がチュニジアに勝って予選を通過した日に韓国もポルトガルに勝って共に決勝トーナメント進出を決めると，18日の初戦で日本がトルコに敗れた日に韓国はイタリアを破ってベスト8に進出，さらに22日の準々決勝でスペインに勝ってベスト4進出の快挙を成し遂げている。開幕前から大会の全期間を通じて日本のテレビは韓国に対して好意的な報道を続けており，批判的な論調は乏しいのだが，こうした両国代表の試合展開の推移に伴って，多少とも韓国に対する視線や報道のトーンに変化が生じていたように思われる。

開幕前から予選リーグにかけて放送された韓国での街頭インタビューでは，「日本も一緒に決勝トーナメントに進もう」という応援の弁やW杯をきっかけに日韓関係が改善することへの期待の声がもっぱら拾われている。一方，それを伝える日本メディアは，韓国における反日感情，日本に対するライバル意識の存在を前提として，韓国の人たちの間に日本を応援しようとする気持が出ていることに驚き，

それを大きな変化として捉える視点が強調されている。開会式の後で「よきライバル韓国との共同開催をどのように感じました」という NHK スタジオからの呼びかけに対して解説者の加藤久は，ソウルから次のように答えている。

「現役の頃は日本チームを応援してくれる人は誰ひとりいなかったんですけども。今はですね，やはり日本と韓国，一緒に勝ち上がろうよ，という感じになっていますからね。僕にしてみれば，僕の現役時代，もう少し応援してくれたらな，と思いますけれど。非常に日本に対して友好的な気持っていうものが，市民の皆さんも，それからサッカー関係者の皆さんも非常に強いです。(「ニュース 10」5 月 31 日)」

また日韓共に決勝トーナメント進出を決めた後，番組内の「多事争論」というコーナーのテーマを「様変わり」として，筑紫哲也は次のような発言をしている。

「(前略) 今大会始まって以来ずっと両国内で共通の気分というのは，両国とも一緒に勝ち進んで行けたらいいなぁ，そういうものが世論の多数派といっていいでしょう。で，これ当たり前のように思えますけれども，ちょっと前を考えると相当な様変わりです。サッカーというものが非常に人気が出始めて以来ずっと日本と韓国は，特に韓国の方はその気持が強かったと思いますが，どこのチームに負けても，このチームだけには負けたくない，それがお互いにとって日本と韓国でありました。その時から考えると，本当に世の中，変わったという気がいたします。しかしながら，そういう対抗心があったということが，今大会で初めて両国ともワールドカップで勝利を挙げるということにも大きく貢献しています。つまり競争というものをうまく生かしていくと，お互いに利益になるというひとつの例だろうと思います。(後略) (「NEWS23」6 月 17 日)」

日韓のライバル意識が大会の成功の一因となったという筑紫の見解は，大会終了後の総括として「ひとりひとりのサポーターが共同開催国の日本に負けないように大会を盛り上げようとした点も見逃せない」とした望月鶴雄 NHK ソウル支局長のコメントにも共有されており，そこでは試合後のごみ片付けをしている映像を示して「マナーでも日本に負けたくないね (「ニュース 10」7 月 2 日)」という韓国人男性サポーターの声を紹介している。

一方，日本のメディアが韓国の試合を伝える際にも，スタジオや現地からのリポートには韓国を応援する気分が横溢しており，それは決勝トーナメントで日本が敗退した後も継続している。たとえば韓国が PK 戦でスペインを破ってベスト 4 進出を決めた日の「サタデースポーツ (6 月 22 日)」における堀尾正明，青山祐子の両キャスターの以下のような冒頭のやりとりは，その典型例であろう。

堀尾「韓国やりました。また歴史を塗り替えました。あの優勝候補のスペインを破り，アジア勢で初めてのベスト 4 進出です。ねー，やりましたねー。」
青山「やりましたねー。興奮しちゃいますよね。でも韓国は，スタジアムだけでなく，街中もチームカラーの真っ赤。しかも日本からも韓国に大声援が送られていましたねー。」
堀尾「まあ日本の J リーグで活躍している選手もいますから，それだけやっぱりわれわれ日本人も

うれしいですよね。」

決勝トーナメント以降の韓国の試合を伝える際には，新宿職安通りや大阪生野区など在日コリアンが多い地域で日本人と韓国人が一緒に応援している姿がしばしば映し出されるようになっている。また日本人が韓国チームを応援していることが韓国メディアで好意的に受け取られていることもニュースとして取り上げられている。テレビ朝日は6月18日の「ニュースステーション」を休んでイタリア―韓国戦を中継しており，その際の角澤照治アナの次のような実況中継が韓国の新聞で大きく取り上げられたことが20日放送の同番組の中でやや誇らしげに伝えられていた。

「やりました韓国。共催の日本のパートナー韓国が開催国の意地をみせて，このイタリアを破ってベスト8進出！　今テレビをご覧の皆さんも韓国に拍手を送りましょう。すばらしい韓国の気迫。おめでとうベスト8進出！（角澤の実況中継VTR「ニュースステーション」6月20日）」

この放送をめぐっては，「行き過ぎた韓国応援放送」としてインターネットの掲示板やタブロイド紙，週刊誌で猛烈な批判を浴びたというし（ファン，2003），過剰な韓国絶賛報道を続けたマスコミへの不信感がインターネットでの嫌韓感情の噴出を促したという指摘もなされている（鈴木，2002）。実際に韓国が日本よりも良い成績を収めたことに関しては，テレビ番組の中で日本人関係者の複雑な心情も吐露されている。たとえば韓国がスペインを破った翌日の「やべっちFC（6月23日）」にゲスト出演した明神智和選手は，Jリーグの韓国人チームメートの活躍について「うれしい反面，韓国が勝って日本が負けたというのは，やはり悔しいってところもあります」とコメントしているし，この試合を中継した日本人スタッフの声として「同じアジアの同胞の日本が負けてしまったのは残念だと韓国人は言うが，少し余裕のある態度で言われるのが日本人としては悔しい」という趣旨の感想が伝えられている（テレビ朝日「スマステーション」6月22日）。

ポルトガルに次いで，イタリア，スペインとヨーロッパの強豪チームを韓国が次々に打ち破ると，ヨーロッパからの韓国批判がいくつか取り上げられるようになっていく。ひとつは，イタリア戦でVゴールを決めたアン・ジョンファン選手に激怒して，ペルージャのガウチ会長がアン選手を解雇する意向を表明したというものであり，これについてのスタジオの反応はガウチ会長にきわめて批判的なものであった。もうひとつは，審判の誤審によるトラブルがあったことをFIFAが認めたという報道であり，これは韓国の試合に限られたものではないのだが，イタリア戦，スペイン戦での韓国に有利な判定がしばしば槍玉にあげられていた。この点に関する報道姿勢は「大会の初めからくすぶっていた判定への不満が韓国の躍進によって火がついた格好になった」というナレーション（「ニュースステーション」6月24日）や「ホームチームの韓国をめぐってトラブルが多いような気がするのだが」といったコメント（「NEWS23」6月24日）に示されるように，韓国に対して決して同情的なものではなかった。

また韓国チームの強さの理由についての言及も増えているが，「韓国の選手はフィジカルが強い。運動量が落ちない。（水沼貴史「スーパーサッカーPLUS」，6月22日）」「韓国は戦術面じゃなくて，フィジカルを中心にトレーニングを積んでたらしいんです。（白石美帆「Jスポーツ」，6月23日）」「パッション，パワー，勝利への執着心（川平慈英「ニュースステーション」6月19日）」「負けないぞという気持ちが萎えない（加藤浩次「スーパーサッカーPLUS」6月22日）など身体，精神両面の強さがもっぱら

強調されている[6]。やや軽めの企画としては，6月21日の「ニュースステーション」で『韓国躍進の裏に食のパワーが』というキムチと高麗人参の2つの食材に焦点を当てた特集が放送されている。そして7月1日の「ニュースステーション」に出演した日本サッカー協会副会長（当時）の川淵三郎が，日本と韓国がサッカーそのもので頑張ったことを成功の要因としたうえで「韓国は，心技体で日本よりも全体に勝っていた。われわれも頑張れば，世界の檜舞台であそこまで行けるということを韓国に教えてもらった。」と日韓共催のW杯を総括している。

この他にも，大会終了後には，W杯を振り返って日韓共催の成果を検証する試みが多くなっており，そこでは共同開催ではなく，分散開催（望月NHKソウル支局長「ニュース10」7月1日）あるいは併列開催（藤井誠二「ニュースステーション」7月1日）だという批判もなされているが，全体としてはW杯によって両国の距離が縮まったという肯定的な見方が支配的になっている[7]。

以上の分析は，メディア言説に基づくものであるが，今回のW杯の韓国関連報道で最も強く視聴者の印象に残ったのは，ソウル市庁前に集まって「テーハンミングック（大韓民国）」と叫びながら熱心な応援を続ける赤いユニフォームの群集，熱狂的な韓国人サポーターの映像であろう。この映像は，W杯における韓国を象徴するものとして各局共に繰り返し放送しており[8]，韓国人は「愛国心が強い」「気性が激しい」「集団主義」といったステレオタイプ的イメージがW杯開幕前から閉幕後にかけて強化されたという調査結果は（上瀬・萩原，2003, 2004），こうしたテレビ報道のあり方を反映している部分が大きいように思われる。

4. W杯関連報道に対する大学生の評価—質問紙調査

それでは大会終了から3ヶ月を経過した2002年10月初旬に首都圏の6大学の学生を対象に実施された質問紙調査に基づき，今回のW杯に関するメディア報道がどのように評価されていたかを最後に検討してみよう。いずれの大学においても調査は，授業時間中に集団実施されており，ここでは無回答の多いものを除き，785名（男368名，女417名）の回答を分析している[9]。

W杯の成果やメディア報道に関する評価は，どの程度深くW杯に関わっていたかによって異なってくる可能性が高い。今回の調査では，W杯に関連する20の具体的行動を例示して，大会期間中にそれぞれに該当するようなことをしたかどうかをチェックする形でW杯への関与度を測定している。その結果を整理した表4をみると，大多数が友人や家族とW杯の話をしたり，スポーツニュースや試合中継・ニュース以外のW杯関連のテレビ番組を見ていたことが判明する。しかし実際に日本代表やそれ以外の試合を見に行ったのは3%と少なく，またユニフォームやTシャツを買ったり，チケットを取ろうとしたり，スポーツカフェやホールに出かけるなどの積極的な行動をした者は，少数派に止まっている。従って，テレビ観戦が最も一般的なW杯への接し方ということになるが，やはり日本代表以外よりも日本代表の試合の方が高い割合で見られており，テレビ観戦の仕方としては一人よりも家族と一緒に見ることの方が多くなっていることが確かめられる。その他の視聴形態としては，スポーツカフェやホールなどで大勢で観戦することはあまりないとしても，日本代表の試合に関しては，一人よりも自宅や友人宅に集まって数人で観戦することの方が多くなっているのは興味深い。なお以下の分析では，20項目のうちいくつチェックしたかを指標としてW杯への関与度を尺度化し（α=.798），その数が5以下を「低群（221名）」，6から9を「中群（312名）」，10以上を「高群（252名）」としてW杯関与度による評価の違いを検証している。

表4　W杯への関与度を測定するための20項目と各項目の肯定率(%)

友人とW杯の話をした	94%
家族とW杯の話をした	82%
スポーツニュースなどでW杯の試合結果を確認した	78%
W杯期間中，TVでW杯関連の番組（試合中継やニュース以外）を見た	67%
日本代表の試合の生中継を，家族と観戦した	58%
日本代表の試合の生中継を，自宅や友人宅に集まって数人で観戦した	52%
日本代表以外の試合の生中継を，家族と観戦した	50%
日本代表以外の試合の生中継を，一人で観戦した	45%
日本代表の試合の生中継を，一人で観戦した	39%
W杯期間中，インターネットでW杯関連の記事を読んだ	37%
日本代表以外の試合の生中継を，自宅や友人宅に集まって数人で観戦した	32%
試合の後，仲間と「日本」コールなどをして騒いだ	31%
日本代表の試合の生中継を，スポーツカフェやホールなどで大勢で観戦した	27%
電話やインターネットでW杯のチケットを取ろうとした	24%
W杯の記事が出ているスポーツ新聞やサッカー雑誌などを買った	23%
試合の後，見知らぬ人とW杯についておしゃべりをした	14%
日本代表のユニフォームやTシャツを買った	10%
日本代表以外の試合の生中継を，スポーツカフェやホールなどで大勢で観戦した	10%
日本代表以外の試合を見に行った	3%
日本代表の試合を見に行った	3%

この調査には，W杯の評価に関わる質問がいくつか含まれているが，「W杯共催によって日韓関係は変化したと思うか」という質問に対しては，「改善した」8%，「多少改善した」59%という2つの回答を併せると全体の3分の2に達しており，好意的な見方が大勢を占めていることが判明する。日韓関係は「変わらない」とした者も31%と比較的多くなっているが，「多少悪化した」「悪化した」という否定的評価は，それぞれ1%を占めているにすぎない。この質問への回答には，性別などの属性による違いも，W杯への関与度による違いも現れていないが，一般にW杯への関与度の高い者ほどW杯の成果を肯定的に評価する傾向が認められる。たとえば「W杯で日本代表を応援することによって，これまでになく幅広い連帯感が日本人の間に生まれた」という肯定的意見に対しては，W杯関与度の高い者ほど賛同する割合が高く，逆に「W杯期間中のサッカーブームは，一時的なものなので，今後，それが日本に定着することはない」「W杯は，一般に国と国との関係を改善するよりも，対立を深める原因になることの方が多い」といった否定的意見に賛同する割合は，関与度の高い者の間で低くなることが確かめられているのである。

さらにベスト16という日本代表の結果に対する満足度を尋ねたところ，「まあ満足」という回答が46%と最も多く，次いで「満足」26%，「どちらとも言えない」18%となっており，「やや不満」8%と

「かなり不満」2%を併せても1割程度にすぎず，全体としては満足が不満を大きく上回っていることが明らかになった。一方，アジアで初めて韓国がベスト4進出を果たしことに関しては，「同じアジアの国としてうれしかった」49%，「日本よりも上に行ったので悔しかった」51%と二つの回答の選択率がほぼ拮抗する形になっている。なお，W杯への関与度別に「悔しかった」という反応の割合をみると，「低群」41%，「中群」48%，「高群」64%となっており，W杯に深く関与していた者ほど韓国の躍進に否定的な感情を抱く傾向が示されている。

W杯関連のメディア報道については，7つのステートメントを用意して，その内容にどの程度賛同するかを「そう思う」から「そう思わない」までの5件法で回答するよう求めている。賛同の程度が強くなるほど数値が大きくなるように回答を得点化し，平均値の高い順に項目を再配列して，それぞれの回答の分布を整理した結果を表5に示す。

これをみると「日本のメディアは，W杯共催国の韓国に対して全体に好意的な報道をする傾向がみられた」に対する賛同が最も高く，逆に「W杯期間中の日本のメディアは，韓国を『アジアの仲間』としてよりも『ライバル』として報道する姿勢が強かった」に対する賛同が最も低くなっていることがわかる。前者に関しては「そう思う」「まあそう思う」を併せると8割を超えているのに対して，その割合は後者に関しては15%程度にすぎず，半数以上が「あまりそう思わない」あるいは「そう思わない」と回

表5 W杯関連のメディア報道に対する評価：7つの質問に対する回答の分布(%)と平均値

質問項目	そう思う (5)	まあそう思う (4)	何ともいえない (3)	あまりそう思わない (2)	そう思わない (1)	平均値 (標準偏差)
日本のメディアは，W杯共催国の韓国に対して全体に好意的な報道をする傾向がみられた	37.8	43.0	14.7	3.7	0.8	4.14 (0.85)
W杯期間中のメディア報道は，サッカーの話題ばかりで，他の重大ニュースの扱いが小さくなっていた	34.3	44.9	11.4	7.4	2.0	4.02 (0.97)
W杯期間中，サッカー以外にも，各国の文化や国情を知らせる番組が増えたので，今まで知らなかった国に対する関心や知識が増えた	18.6	43.0	23.4	10.6	4.3	3.61 (1.04)
日本のメディアは，優勝したブラジルをはじめとする南米諸国よりも，フランス，イタリアなどヨーロッパ諸国の話題を多く取り上げていた	23.3	30.2	29.3	13.4	3.8	3.56 (1.10)
W杯期間中のメディア報道には，日本人の愛国心を煽り立てるような自国中心主義的傾向がみられた	18.3	31.1	29.7	15.6	5.4	3.41 (1.12)
W杯期間中の韓国のメディアは，日本を「アジアの仲間」としてよりも「ライバル」として報道する姿勢が強かった	12.8	18.1	43.9	19.0	6.1	3.13 (1.06)
W杯期間中の日本のメディアは，韓国を「アジアの仲間」としてよりも「ライバル」として報道する姿勢が強かった	3.6	11.7	32.0	36.5	16.3	2.49 (1.01)

答しているのである。いずれも日本メディアの韓国報道に関するステートメントであり，大会期間中，総じて日本のメディアが親韓的であったという認識を大多数が共有していたことが裏づけられる結果となっている。

W杯期間中は通常とは異なる番組編成が組まれており，W杯関連情報の扱いが増えた分だけ，他のニュース枠が減少していたように思われる。それに対する批判的意味合いがどの程度込められているかは別にして，全体の8割近くが「W杯期間中のメディア報道は，サッカーの話題ばかりで，他の重大ニュースの扱いが小さくなっていた」という認識を示している。その一方で，6割以上が「W杯期間中，サッカー以外にも，各国の文化や国情を知らせる番組が増えたので，今まで知らなかった国に対する関心や知識が増えた」という意見に賛同しており，大会期間中の番組編成に対しては，必ずしも否定的な見方ばかりではなく，それを肯定的に評価する向きもあったことが示唆されている。

先の内容分析によって日韓両国に次いでブラジルに関する報道量の多いことが判明しているにも拘らず，回答者の半数以上が「日本のメディアは，優勝したブラジルをはじめとする南米諸国よりも，フランス，イタリアなどヨーロッパ諸国の話題を多く取り上げていた」という認識を示している。ロナウドやリバウドといったブラジル勢よりも，ベッカムやカーン，ジダンなどヨーロッパ選手の方が強く印象に残ったということであろうか[10]。こうした国際的なスポーツイベントの報道では，自国のチームや選手を応援したり，その活躍を賞賛するようなナショナリスティックな傾向が必然的に生じてくる。それは今回のW杯に限られることではないが，ここでも半数近くが「W杯期間中のメディア報道には，日本人の愛国心を煽りたてるような自国中心主義的傾向がみられた」という意見に賛同していることがわかる。以上は，いずれも日本のメディア報道に関するものだが，「W杯期間中の韓国のメディアは，日本を『アジアの仲間』としてよりも『ライバル』として報道する姿勢が強かった」という韓国メディアの報道傾向については，やはり判断材料が乏しいせいか，「何ともいえない」と回答を保留する割合が最も高くなっている。

W杯への関与度による評価の違いを検討するために，上記の7項目に対する評定の平均値を関与度の異なる3群ごとに求めて，その差を一元配置の分散分析で検定したところ，表6に示す4項目で有意差が認められた。これをみるとW杯に深く関与した者ほど，大会期間中，日本のメディアは韓国をライバル視することなく，全体に好意的な報道をする傾向があった，という認識を強く示していることがわ

表6　W杯への関与度によって有意差がみられた4項目と関与度別の平均値†（標準偏差）

質問項目	W杯への関与度			F値
	低群	中群	高群	
日本のメディアは，W杯共催国の韓国に対して全体に好意的な報道をする傾向がみられた	3.99 (0.89)	4.15 (0.78)	4.24 (0.89)	5.28**
W杯期間中のメディア報道は，サッカーの話題ばかりで，他の重大ニュースの扱いが小さくなっていた	4.20 (0.85)	3.93 (0.99)	3.98 (1.02)	5.61**
W杯期間中，サッカー以外にも，各国の文化や国情を知らせる番組が増えたので，今まで知らなかった国に対する関心や知識が増えた	3.34 (1.01)	3.63 (1.04)	3.82 (1.02)	12.75***
W杯期間中の日本のメディアは，韓国を「アジアの仲間」としてよりも「ライバル」として報道する姿勢が強かった	2.74 (0.97)	2.45 (1.01)	2.34 (1.02)	9.50***

† 数値が高いほど賛同の程度が強いことを表す．　** $p<.01$　*** $p<.001$

かる。W 杯への関与度を測定する 20 項目の半数は，テレビを通じての W 杯との接触の有無に関する質問によって構成されている。実際に今回の W 杯関連のテレビ報道では，韓国を同じアジアの仲間として好意的に扱うことが多かったために，テレビを通じて W 杯関連情報に多く接した者ほど，そうした報道傾向あるいはバイアスを認識しやすかったということであろう。また大会期間中のテレビ番組編成に対する見方が，W 杯への関与度によって異なってくることも明らかにされている。W 杯への関与が低い者は，サッカー重視のために他のニュースの扱いが小さくなったという否定的側面を強く認識しているのに対して，サッカー以外にも各国の文化や国情を知る機会が増えて関心や知識が増したという肯定的評価は，W 杯への関与度の高い者の間でより顕著に現れているのである。

5. 結　　び

日本中を席巻した W 杯の熱気が去ってすでに久しい。この巨大なメディアイベントを今振り返ると，やはりテレビというメディアの果たした役割の大きさ，社会的影響力の強さを改めて痛感させられる。大多数の人々は，青いユニフォームを着て熱狂的な応援を繰り広げる日本人サポーターの姿をテレビで見て，その熱気を感じていたにすぎない。実際に試合を見に行ったり，日本代表のユニフォームや T シャツを買ったのはごくわずかで，ほとんどがテレビ観戦に終始していたことが首都圏の大学生を対象とした調査で明らかにされているのである。ただ興味深い点は，日本代表の試合中継を友人や家族と一緒に見たという回答が，ひとりで見た場合を上回っていたことである。ほとんどが友人や家族と W 杯の話をしたと回答していることを考え併せると，それほど積極的な行動をとらないまでも，少なくとも大学生の間では W 杯が共通の話題，関心の対象となっていたことが裏づけられている。Dayan and Katz (1992) は，予定されたテレビ中継のために時間をやりくりして友人を招いたり，時には飲食を共にしながら，他の人々と一緒に時間を共有するといった祝祭的性質をメディアイベントのひとつの特徴として挙げている。Rothenbuhler (1988) は，1984 年のロサンジェルス・オリンピックに関して，こうしたメディアイベントの特徴を裏づける調査結果を報告しているが，今回の W 杯に関しても同様の傾向が示されたことになろう。

W 杯の試合中継の視聴率の異常な高さは，サッカーファン以外の多くの人々がテレビを見ていたことを意味する。それはサッカーに限られることではないが，競技についての知識や関心の乏しい人を，その試合中継に惹きつけるのには，いくつかの条件があるように思われる。ひとつは，対戦相手の片方に感情移入して，その応援を熱心にすることである。どちらのチームにも肩入れせず，第三者的立場で試合展開を楽しめるのは，よほどのサッカー通であろう。サッカーに詳しくない人でも，自国代表の勝利を願って応援することによって，容易に試合に熱中できたのではなかろうか。国際的なスポーツ競技のメディア報道は，きわめてナショナリスティックな姿勢を示すのが常であり，日本代表の試合での身びいきな中継や解説が自国チームに対する視聴者の感情移入を容易にしたという点も見逃せない。あるいは日本代表以外の試合中継でも，どちらか一方を応援するような視聴者が多かったのかもしれない。ただし外国のチーム同士の対戦を伝えるメディアに対しては，ある程度の公平性を保つことが暗黙裡に期待されており，それにも拘らず今回の W 杯での韓国戦のテレビ中継では，韓国びいきの色合いが強く出ていたために，一部で反発が生じたとも考えられる。

スポーツ競技に対する一般の関心を高めるためのもうひとつの条件は，そこに何らかの人間的興味に訴えるような物語が付与されることである。今回の W 杯では，試合以外の情報も数多く伝えられてい

るが，そこには参加32カ国の間できわめて顕著な格差が生じており，また何人かのスター選手や監督に取材が集中していたことが明らかにされている。たとえば報道対象となる回数が最も多かったイングランドのベッカムについては，ヘアスタイルやファッション，家族などサッカーとは無縁な情報以外に，前回のフランス大会のアルゼンチン戦で反則を犯して退場となり，チームが敗れたことに焦点が合わされ，予選リーグでのアルゼンチン戦が近づくと，それを因縁の対決として捉え，ベッカムにとってのリベンジの物語として再構成しようとする動きが現れていた。開幕前の中津江村におけるカメルーン選手と村民との異文化交流の物語にしても，開幕後のカメルーンの試合に対する一般の関心を高め，新たな視点で試合を見ることを可能にしたのかもしれない。それがどのようなものであれ，チームや選手，監督についての知識や情報が増すことによって視聴者の視野が広がり，試合に興味をもちやすくなるのは確かであろう。チームや人物に焦点を当てたエピソード型の報道スタイルは，テレビの得意とするところであり，対象に大きな偏りがあるとはいえ，いくつものチームや個人に関するさまざまなエピソードが開幕前から積み重ねられていたのは事実である。

試合について言えば，予想通りの結果よりも，予想外の結果の方が一般の関心を集めやすい。実際，前回優勝のフランスや強豪のアルゼンチンの予選リーグ敗退のニュースは，かなり大きく扱われていた。それ以上に下馬評の高くないチームが強豪を次々に破るという予想外の展開は，一般の興味を惹きやすいはずである。その意味で韓国のベスト4進出は，物語性に富んだ展開であり，今回のW杯でのひとつのハイライトとなっていた。メディア側では決勝トーナメントにおける韓国の試合を，同じアジアのチーム対ヨーロッパの強豪チームの対決という図式で捉えようとしていたが，その一方で韓国に対するライバル意識も根強く存在している。上述の大学生調査では，韓国が日本よりも上位に勝ち進んだことを「うれしい」とする者と「悔しい」とする者が丁度半々になっており，個々の日本人の心の中にもアンビバレントな感情が存在する可能性が強く示唆されている。今回は日本と韓国の直接対決はなかったが，W杯共催によって今後の日本と韓国とのサッカー対決が，新たな物語を獲得したのは間違いない。

ところでW杯が閉幕して1年半近く経過した2003年11月19日に日本代表とカメルーン代表の国際親善試合「キリンチャレンジカップ2003」が，カメルーン代表が中津江村でキャンプをしたことが縁となって大分市の大分スタジアムで開催された。この試合に関する新聞報道では，中津江村との結びつきが特に強調されてはおらず，3大紙の中では毎日新聞が小さな囲み記事で中津江村の坂本休村長にカメルーンにおける最高位のシュバリエ勲章が授与されたことを報じているにすぎない（2003年11月20日朝刊）。一方，11月19日の試合後のニュース番組における中津江村の扱いは，放送局によって大きく異なっていた。本稿での分析対象となった3番組のうち，「NEWS23」では試合の結果のみを簡潔に伝えたのに対して，スポーツコーナーのトップで試合の様子を取り上げた「ニュース10」では，中津江村の3分の1にあたる400人がスタジアムに応援にかけつけたことや親善に貢献した坂本村長に勲章が授与されたことがニュースとして取り上げられていた。そして，この試合を中継したテレビ朝日の「ニュースステーション」では，メインの久米宏の他にスポーツ担当の角澤照治，サッカー解説の川平慈英の3人が大分スタジアムに出向き，中津江村の鯛生スポーツセンター所長をゲストに迎えて現地からの生中継で放送しており，この日の中津江村の人々の朝からの動きをビデオ映像で詳しく紹介していた。

おそらく1964年の東京オリンピックと同様，今回のW杯もアジアでの初開催ということで日本人

の多くが共有する集合的記憶，国民的記憶として残されていくことになろう。しかし何が国民的記憶の中心となるかを考えた場合，そこにはサッカーの試合やブラジルの優勝といった本質的部分よりも，むしろ韓国の躍進やイングランドのベッカムといったスター選手の存在，あるいは中津江村とカメルーンの異文化交流といった周辺的エピソードの方が色濃く反映されていく可能性が高いように思われる。こうした国際的スポーツイベントに関する集合的記憶を形成するうえでは，やはりテレビ映像のインパクトが圧倒的に強く，そこでのイベントを捉えるメディアのフレーム，いかなる物語に仕上げるかということが特に大きな役割を果たすことが再認識された次第である。

注

1) 2001 年度に慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所を母体に発足した「メディア・ステレオタイピング」研究プロジェクトでは，この他に「ここがヘンだよ日本人」というバラエティ番組やテレビ CM を素材とした分析を行っており，これらの研究に対して同研究所の研究・教育基金，放送文化基金，文部科学省科学研究費（基盤研究 C）による資金補助を受けている。
2) 「ニュース 10」では，有働由美子がスポーツコーナーを担当し，大会期間中は加藤久が解説者としてレギュラー出演していた。「NEWS23」でも同様に，小倉弘子がスポーツキャスター，中西哲生が解説者という体制を終始一貫して取ったのに対して，「ニュースステーション」では，そうした役割を固定せず，臨機応変の対応をしていた。当初は真中瞳と角澤照治がスポーツコーナーを交替で担当していたが，大会期間中は河野明子がサッカー以外のスポーツを担当し，解説者に近い役割の川平慈英と共に，角澤はサッカーのみを担当する形にシフトしていた。
3) この点に関してファン (2003) は，中津江村での出来事の多くは，カメラを意識した演技性の高いものであり，それはメディア・リアリティにすぎない，と批判している。
4) なお FIFA 総会については，テレビ朝日のみがカバーしており，会長選挙などについて NHK と TBS は一切言及していない。またフーリガン対策については民放よりも NHK が力を入れているのに対して，職場観戦問題は民放のみが取り上げるなど，いくつかの争点に関して局による扱いの違いがみられた。
5) ここでは試合中のプレイに関して特定の選手が言及された場合を除外しているが，各代表チームの最初の試合のテレビ中継を分析対象とした日吉 (2003) は，逆に，実況・解説の部分に限定して各選手への言及回数の集計を行っている。その結果をみるとポルトガルのフィーゴ，イタリアのビエリへの言及回数が飛び抜けて多く，イングランドのベッカムは全体の 6 位となっている。イングランドに関しては，スウェーデン戦のテレビ中継が分析対象とされており，その中ではベッカムへの言及回数が最も多くなっているのだが，それ以上に試合を離れた文脈でのメディアの注目がベッカムに集中していたことが裏づけられたことになろう。
6) こういう形での韓国サッカーの捉え方は，「日本は組織力と個人技」，「韓国は体力，闘志，そして日本だけには負けたくないという闘争心」という二項対立的な差異化の図式の存在を指摘するファン (2003) の見解と見事に符合している。
7) 大会終了後，日本と韓国の新聞が共同して両国での世論調査を行っており，日本と韓国で意識の隔たりがみられる部分はあるにしろ，ここでも日韓共催の W 杯の成果に関しては概ね肯定的な評価が大勢を占めることが強調されている。朝日新聞と東亜日報の共同調査では（朝日新聞，2002 年 7 月 7 日），W 杯を機会に「韓国（日本）の人や文化を以前よりも身近に感じるようになった」という回答がいずれの国でも過半数を占めており，また毎日新聞と朝鮮日報の共同世論調査では（毎日新聞，2002 年 7 月 10 日），W 杯共催の影響で日韓関係は「よくなった」「ある程度よくなった」という回答を併せると日本では 65%，韓国では 75% に達し，共催決定直後よりも 30% ほど増加していることが明らかにされているのである。この点に関するより長期的な世論の動向に関しては，尾鳴・小林 (2003) を参照されたい。
8) 外国に関するテレビ映像には，ステレオタイプが援用されることが多く，優勝したブラジルに関しては，リズムに合わせてサンバを踊るというスタイルの応援風景が何度も放送されている。ブラジルがイングランドに逆転勝利を収めた日の「ニュースステーション（6 月 21 日）」では，日系ブラジル人の多い群馬県大泉町，愛知県豊田市とリオデジャネイロで勝利に沸く人々の様子を伝えており，リオデジャネイロの映像には「サンバ」の文字がいくつもかぶされていたが，実際にサンバを踊っているような人は見当たらなかった。

9) 回答者の大学別の内訳は，慶應義塾大学236名，平成国際大学162名，江戸川大学123名，武蔵大学119名，聖徳大学112名，駒澤大学33名となっている。

10) ちなみにビデオリサーチコムハウスのテレビCMライブラリーでW杯が開催された2002年中に外国人サッカー選手を起用した関東地区の地上波テレビにおける新作CMの数を調べてみると，ベッカムが登場したCMが20本と最も多く，次いでジダン19本，ロナウド9本，カーン5本，リバウド3本となっていることが判明する。従って，ベッカムとジダンの二人のヨーロッパ選手が最も多く日本のテレビCMに登場していることになるが，ベッカムCMの大半（20本中16本）がW杯後に制作されているのに対して，ジダンCMの多く（19本中13本）は，W杯前に制作されており，ここでもベッカム人気がW杯を契機に高騰したことが明確にされている。

引用文献

Dayan, D., & Katz, E. (1992) *Media events: The live broadcasting of history. Harvard University Press.* [浅見克彦（訳）(1996) メディア・イベント　歴史をつくるメディア・セレモニー　青弓社]

黄　順姫（編）(2003)　W杯サッカーの熱狂と遺産—2002年日韓ワールドカップを巡って　世界思想社

黄　盛彬 (2002)　2002W杯はどのように語られたか—試論「日韓比較」の再考：1996年共催決定から2002年開幕まで—　立命館大学人文科学研究所紀要，**81**, 25-54.

ファン・ソンビン (2003)　W杯と日本の自画像，そして韓国という他者　マス・コミュニケーション研究，**62**, 23-39.

日吉昭彦 (2003)　テレビ中継は何を語ったか—試合の実況アナウンスの内容分析　牛木素吉郎・黒田　勇 (2003) ワールドカップのメディア学　大修館書店，pp. 173-198.

上村修一 (2002)　ワールドカップの熱狂とテレビ～「2002年ワールドカップサッカーに関する調査」から　放送研究と調査（10月号），12-19.

上瀬由美子・萩原　滋 (2003)　ワールドカップによる外国・外国人イメージの変化　メディア・コミュニケーション，**53**, 97-114.

上瀬由美子・萩原　滋 (2004)　ワールドカップによる韓国・韓国人イメージの変化　人間と社会の探究（慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要），**57**, 111-124.

向田久美子・坂元　章・村田光二・高木栄作 (2001)　アトランタ・オリンピックと外国イメージの変化　社会心理学研究，**16**, 159-169.

尾嶋史章・小林大祐 (2003)　日韓共催と世論の動向　牛木素吉郎・黒田　勇 (2003)　ワールドカップのメディア学　大修館書店，pp. 199-222.

Rothenbuhler, E. W. (1988) The living room celebration of the Olympic games. *Journal of Communication*, **38**(4), 61-81.

Sakamoto, A., Murata, K., & Takaki, A. (1999) The Barcelona Olympic and the perception of foreign nations: A panel study of Japanese university students. *Journal of Sports Behavior*, **22**, 260-278.

鈴木洋史 (2002)「検証」なきW杯報道　毎日新聞7月29日夕刊（「男と女のスポーツ・サイエンス」）

高木栄作・坂元　章 (1991)　ソウルオリンピックによる外国イメージの変化—大学生のパネル調査—　社会心理学研究，**6**, 98-111.

牛木素吉郎・黒田　勇 (2003)　ワールドカップのメディア学　大修館書店